



幹線道路のすぐそばまで迫るアブラヤシのプランテーション



BBECによって整備されたサバ大学熱帯生物学保全研究所の標本庫。ペセリンさんの研究拠点でもある



国際生物多様性の日である2010年5月22日、サバ大学では、JICAの研修として日本で植林を学んだ熱帯生物学保全研究所員の発案をもとに、大きな植樹イベントが開かれた。「将来学生たちが使う森林の研究サイトになれば」と発案者のエリア・ゴドンさん

1990年代よりパームオイル産業が盛んになり、生産量はインドネシアに次いで世界第二位。中でも国内最大規模の生産量と農地面積を持つのが、このサバ州だ。

こうしたプランテーションなどを目的とした森林伐採により、近年、ボルネオでは熱帯雨林が急速に減り続けている。サバ州で農地転換される土地は年間約9万ヘクタール。かつて熱帯雨林に覆われていたこの地の森林面積は、ほぼ半分になった。そのため、生息場所を失った野生の動植物が個体数を減らすなど、サバ州の貴重な生物多様性はまさに危機的な状況にある。そうした状況を少しでも改善

するために必要なのは、州政府や関係組織、開発業者、伝統的に自然資源を利用してきた人々、一般市民など、森の恵みを楽しむすべての関係者を巻き込んだ取り組み。生物多様性と人間のあらゆる社会経済活動は、切っても切り離すことができないからだ。そこで、JICAが2002年に開始したのが、サバ州の生態系を守り続けていくための支援「ボルネオ生物多様性・生態系保全プログラム」(BBEC)。02～07年までの「フェーズ1」で、生態系の研究・調査体制の整備、環境教育・啓発活動の促進、エコツーリズムを活用した住民参加型の自然管理など、保全の土台とな

る技術や知識をそれぞれの関係組織に移転。その経験を生かして「フェーズ2」では、関係組織の連携を促し、州が一体となって生物多様性保全に取り組んでいくための体制・政策づくりを行っている。

人々の保全への理解を促進

サバ州の州都・コタキナバル郊外の広大な敷地に、州初の国立大学として1994年に開校したサバ大学。キャンパスの一角に、生物多様性保全のための研究・調査の拠点であり、BBECが専門家の派遣などを通じて技術協力を行ってきた「熱帯生物学保全研究所」がある。「現在、ここには昆虫や動物



ボルネオに残された財産を守るために

世界で最も生物多様性が高い地域の一つ、ボルネオ。だが今、迫りくる開発の波がその大自然の営みを破壊しようとしている。人と自然が共生する豊かなボルネオを取り戻すため、JICAはマレーシア・サバ州で包括的な生物多様性保全に取り組んでいる。

消える熱帯雨林

飛行機の小さな窓から、うつそうと茂る緑の森と、その間を縫って蛇行する大きな薄茶色の川が見えてきた。マレーシア・ボルネオ島北東部、サバ州上空、眼下には、アマゾンやコンゴ盆地周辺と並ぶ世界最大級の熱帯雨林が広がっている。ボルネオゾウ、テナグザル、オランウータンなどの野生動物、世界最大の花を咲かせるラフレシアやさまざまな食虫植物、マンダローブ林がはぐくむ水生生物など、多種多様な生命に満ちた自然の楽園、ボルネオ。まさに世界屈指の生物多様性があるところだ。

そう感慨に浸っていたのもつかの間。ふと遠くを見ると、熱帯雨林とは様子の違う、やや異様とも思える光景が目飛び込んできた。定規で測ったように整然と植えられた無数のアブラヤシが、はるか彼方まで続いている。パームオイルのためのプランテーション(大規模農園)だ。アブラヤシの実から採れるパームオイルは、カップめんなどの食品、洗剤・シャンプーといった日用品などの欠かせない原料として、日本でも幅広く使われている。マレーシアでは

熱帯雨林ディスカバリーセンターに広がる深い森。初めて耳にするさまざまな鳥のさえずりが響き渡っていた。こうしたボルネオの森や貴重な野生生物が、今、危機に瀕している

from マレーシア
MALAYSIA



BBECでは、豊かな森に覆われた州北西部のクロッカー山脈国立公園で、昔から森林保護区内に住む人々(上)とともに、住民参加型の公園管理の実践にも取り組んでいる。その成果は、東南アジアやアフリカの行政官などを招いて行う、JICAの第三国研修でも紹介されている(下)

街・サンダカン郊外にある「熱帯雨林デイスカバリセンター」。敷地内の豊かな熱帯雨林に間近に触れることができ、展望台やキャノピーウォーク(木製のつり橋)なども備えた環境教育のための施設だ。散策路では、小学生たちが高さ30メートル近くはある巨大な木に、歓声を上げていた。こうした地域の環境教育拠点と連携しながら、サバ州の環境教育を担当する首席大臣府科学技術室とともに、生物多様性の危機や環境保全の重要性を伝える活動に力を入れてきたBBEC。これまでに、小中学生向けの教材作成や、フィールド演習を含む教員向け研修などを実施。また、一般市民にBBECロゴマークのデザインを募ってコンテストを開催し、活動の周知に努めたほか、広報の強化策として地元メディアを招き「BBEC現場視察ツアー」も行った。そして09年4月には、それまでの環境教育・啓発活動の経験を生かし、州政府と協議しながら作成した「サバ州環境教育政策」が正式にサバ州閣議の承認を得た。これにより、教育界、市民、メディア、地域の環境教育リソースなど、さまざまなアクターが参加する

連携が生んだ条約への登録

「原動力となったのは、BBECフェーズ2で推進した、関係組織による『協働作業』でした」とチーフアドバイザーの長谷川基裕・JICA国際協力専門員。ラムサール条約への登録申請作業を通じて、サバ州で自然資源管理に携わる行政間の『連携』が生まれたという。

「自然資源は、水や土壌、森、生物などさまざまです。そのため、森であれば森林局、生物であれば野生生物局というように、それぞれの関係組織が縦割りに資源管理を行っています。しかし、生物多様性を包括的に

保全していくには、組織同士の横断的な連携が欠かせません。組織のいろいろな思惑や利害関係を超え、保全のために協調していくことの重要性を感じてもらえたのが、何よりの成果です」

ラムサール条約への登録が終わった今、BBECでは、組織間連携の推進役として08年5月に発足し、BBEC終了後は州の生物多様性保全の取りまとめが期待されている「サバ州生物多様性センター」とともに、二人三脚の活動を続けている。現在、登録された湿地を守っていくための管理モニタリング計画を作成しているほか、湿地の環境に

も大きく影響を及ぼすキナバタン川の上流域・中流域の環境保全にも着手。中流域に多いプランテーション業者向けに環境啓発も行っていく予定だ。

「例えば汚染を減らす技術を提案したりしながら、環境に対する責任として業者が自ら行動に移すような仕掛けをしていきたい。少しでも多くの『意識改革』を促すことが、保全の第一歩なのです」(長谷川さん)。

生物多様性条約が掲げる国際的な保全目標として、「2010年目標」が採択されたのが02年。まさに同じ年にスタートしたBBECは、その取り組みを通して目標達成に貢献するため、これまで地道で幅広い支援を続けてきた。そして今、その成果がさまざまな場所や人々の間で芽生え始めている。人と自然が共存し、開発と保全のバランスが取れた、生物多様性が守られた社会。サバ州とBBECの一体となった活動は、そんな持続的な社会をつくるための一つのモデルとなり得るのではないだろうか。ボルネオの生物多様性は、まさに人類共通の宝。守るべき財産がまだ残されている今こそ、行動を起こさなければならぬ。



2008年10月にラムサール条約に登録されたサバ州東海岸沿いの湿地帯。地元メディアもそのニュースを大きく報じた

だが、一見生物多様性が豊かなこの場所にも、森林減少の影響は及んでいる。生息場所をなくした動物が湿地の周辺に広がる農作物を荒らしたり、上流域のプランテーションから流れ出る土砂や農薬の影響で、エビなどの漁獲量が減っている。その結果、収入源を失った村人たちの生活が苦しくなり、自分たち

の土地を伐採業者やプランテーション業者に売ってしまうこともある。

そこでBBECでは、村人が土地を手放さずに現金収入が得られ、かつ森の保全にもつながる手段として、エコツーリズムの導入を進めている。若者を中心に運営委員会を組織し、ホームステイ、野生生物の観察、伝統芸能の紹介などを盛り込んだ

ツアーは、観光客にも好評だ。「初めは、自分たちの生活を体験してもらうことがどうお金になるのか、半信半疑でしたが、喜ぶ観光客を見たり、実際に収入を手でできるようになったことで、村人もエコツーリズムの可能性や、森林の本当の価値に気付き始めたようです」と森林局のアブドゥル・サブニさん。「今後もBBECとともに、湿

村人と自然との共生を

包括的な環境教育モデルが実践されるようになった。



個性豊かなボルネオの野生生物の数々



市民が参加したデザインコンテストによって生まれたBBECのロゴマーク